たまゆらの雪丘

建築・都市アメニティグループ
B10C019　木村洋子

自由通路　　プレイパーク　　駅
広域避難場所　　雪

1. はじめに

地球環境問題が重要視されていることで各分野でも環境に配慮した取り組みが行われており、建築分野についても環境面での対応を迫られている。また平成 23 年 3 月の東日本大震災において、人々の災害への意識が高まり、その対策はよりいっそう強化されるべき課題とされている。

高齢社会に伴い、まちづくりの姿勢としても交通基盤や居住環境の整備等によって高齢者の社会参加を支えることが求められ、一方で都市化に伴うこどもの遊び環境の変化から、こどもたちの時間は塾や習い事等細切れに管理され、仲間と一緒に外で遊ぶ機会は非常に少なくなっていることから、安全で自由な遊び場が必要である。

これより災害時利用可能且つ環境や景観にとけ込み、高齢者がのんびりと時間をすごすことのできる交通・交流の拠点、そして、こどもがのびのびと遊ぶことのできる、緑の「癒し」の空間を設計する。

2. 敷地概要

敷地は青森県青森市にある敷地面積 12.8 ヘクタールの東西に長い広大な公園である。北部を線路、東部と西部を陸橋に囲まれた立地で「青い森セントラルパーク」と呼称されている。北部は 1 キロ以上に渡って該当敷地と線路で断絶されており、徒歩や自転車の行き来は西部の青森中央大橋を渡る、もしくは東部の八甲田大橋下の踏切を渡ることとなる。南東には青森を象徴する山である八甲田山を眺めることができ、東西南方三方向を山に、北方を海に囲まれ、青い森を象徴するみどりの大空間を形成し、市民の交通・交流・憩いの場としての機能を担うべき場である。

敷地は昔ながらの商店街の残る青森駅周辺、季節のイベント毎に賑わう合浦公園、大型商業施設等により新たに青森市の中心部となりつつある浜田地区、この三点の中央に位置する（図 1)。そこでここに交通と防災[注)]の拠点を設けることで、三点の行き来を容易で手軽なものとし、三点それぞれを活性化させることを期待する。

図1　敷地周辺

写真1　敷地の様子

注) 2011 年 4 月、青森行政は「青い森セントラルパーク低炭素型モデル事業構想」を提案したが、同年 10 月、市民の反対等の理由により事業中止となった。事業は集合住宅や戸建住宅、高齢者対応住宅や大学関連施設等が計画競れ、市民の交流拠点を目指していた。市民からは賛成の声もあったものの、一方で災害時の市民の避難場所として活用すべき、住宅は私有地のため交流の場にはなり得ない等の反対意見が多く寄せられた。

3. コンセプト

デザインコンセプトは“とける”とし、周囲の景観にとける・地域の環境にとける・日本の四季にとける、の三つを軸とした。親しみを持ちやすく、市民に長く愛される空間を目指して計画を行う。

自由通路と青い森鉄道の新駅を、公園にはバス停を設けることで重要拠点の中心として市民の移動の利便化を図る。カフェやアトリウム等の屋内空間と公園という屋外空間を設けることで、自由な交流の選択ができる。公園にはこどもの遊び環境の向上として、プレーパーク[(1)]を導入する。西部には高齢者がグランドゴルフ等を楽しめるスペースを確保し、冬期は雪捨て場として活用する。敷地外周の市民に親しまれ、自然とできたウォーキングコースを残すことで、自然監視可能な守りやすい空間構成となる。雪という自然資源を有効に利用し、雪と共生することも重要項目である。

4. 最終設計案

①自由通路

自由通路は六つのガラス体をずらしながらつなげ、その中を斜めに通路として一本の道が通っている。ガラス体を支える柱の中にはパイプが通っており、無落雪屋根の一つであるスノーダクト方式を採用した凹んだ屋根部分に積雪があった際に内側から溶けていった雪水を、パイプを通して地面へと送る。冬は屋根に積雪があることによって、外観が変わっていく楽しみがある（写真 2)。またずらしながら配置したことでスキマが生じる。そのスキマに三角形を基にした模様を配し、一部を開閉式ダンパーにすることで通風可能とした（ 写真 3)。本体は透明であり、公園へ向かう時には季節毎の山並みや公園の木々の移ろいが楽しめる。中心市街地へ向かう時には、青森市のランドマークであるアスパムや新町方面が眺められる。自由通路には、中と外からのアクセスを設け、自転車の通行も可能とした。

写真2　積雪時の自由通路

写真3　自由通路のダンパー

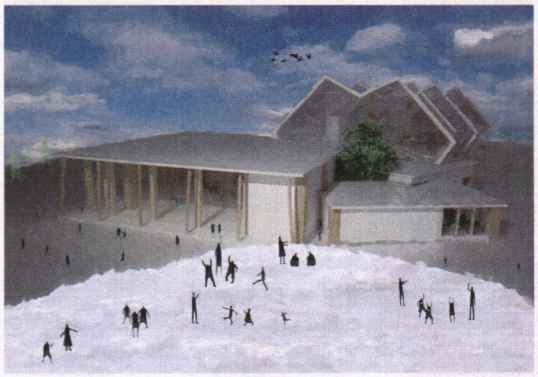

図2　外観イメージ

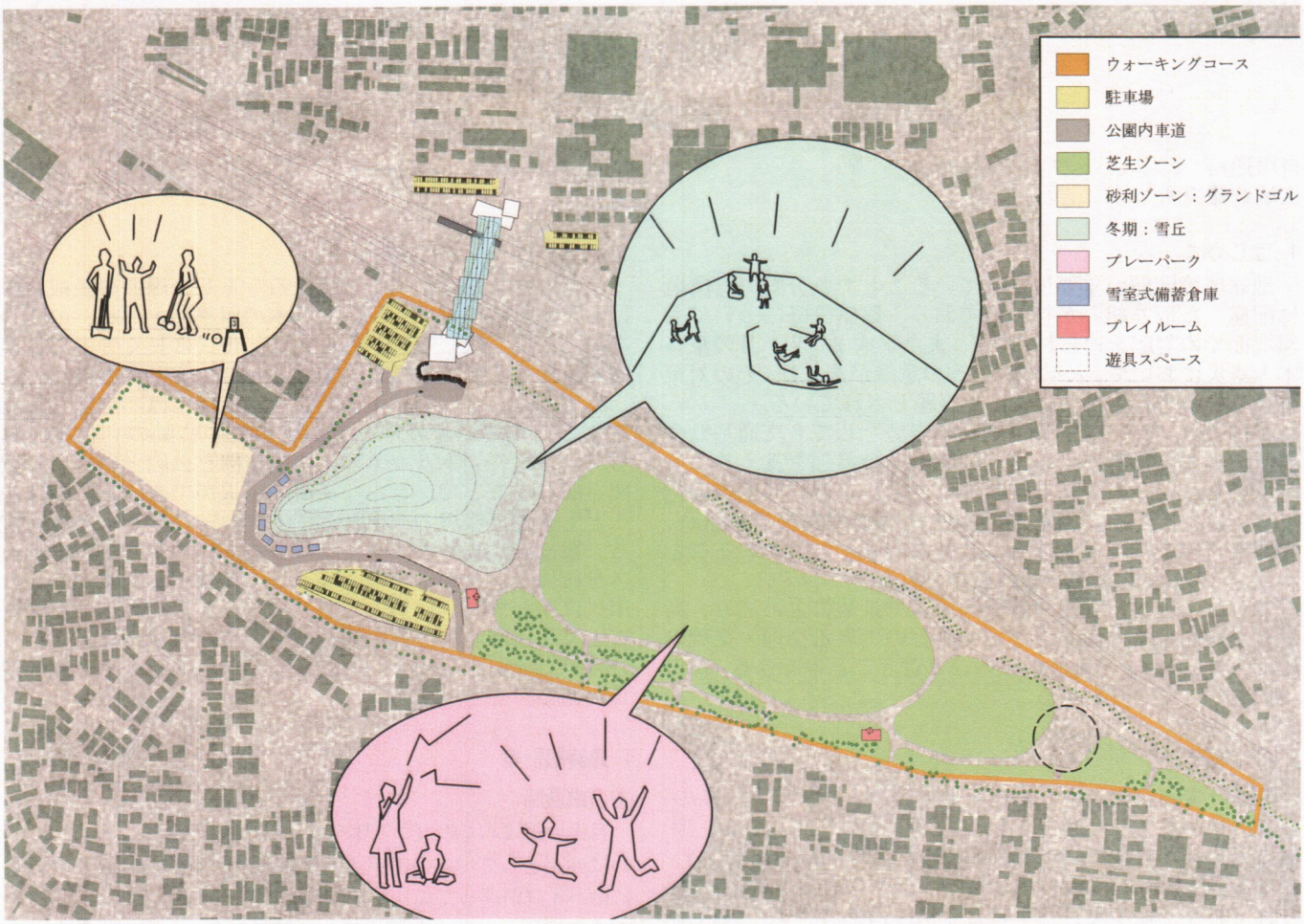

図3　公園の全体イメージ

写真4　北棟

写真5　アトリウム

写真6　カフェ（南棟）

写真7　青森展示スペース

写真8　自由通路

②南棟及び北棟

南棟にはアトリウムとカフェ、住宅街に面する北棟には、電車利用者や公園へ遊びに行く人々が利用する売店を設け、青森県出身の芸術家の作品を展示した（写真 4）。それぞれにトイレと雪冷房のための貯雪倉庫を設けた。

公園に面した南棟には、市民を迎え入れる玄関口となるアトリウムと、公園や電車を眺めながらくつろいだり談笑したりできるカフェを併設した（ 写真 5・6）。管理室付近には市民に親しみを持たれている場所等の写真を展示し、アトリウムには常時イスとテーブルを配置することで、高齢者が腰掛けて話し、高校生が勉強できるようにした（写真 7）。季節による展示等ができるように、パネルを保管する倉庫を用意した。外に扉のある倉庫には、雪掻きのための器具等を収納できる。南棟は大きさの異なる四角形の寄せ集めであるが、その際生じた三角形の隙間に中庭を模して木を植え、視覚的な癒しをすぐ近くで感じられるようにした。

③公園

防災公園として防災トイレやかまどベンチを配置した。東部と中央部にプレイルームを作り、小さなこどもの遊び場や雨天時の遊び場、親たちの休憩スペースとした。

東部はほぼ現在の芝生や道筋を保持し、改修を加えず、プレイパークとして残した。中央部はタイヤ等を細かく刻んだ再生ゴムチップを固めて作られたゴム舗装の地面とした。冬期はほぼ全域に雪丘をつくり、季節限定の小高い遊び場ができる。また備蓄倉庫を兼ねた雪室を設け、一部は夏期に雪遊びのイベント等を開催できる。

西部には現在の通り砂利部分を残し、日常的は高齢者がグランドゴルフ等をできるような場所とする。サーカスや動物園等の開催実績があり、イベント時にも活用できる。

5. まとめ

本設計では、南北の行き来を可能としてアクセス性を高めるための自由通路と、こどもがのびのびと安全に遊ぶことのできるプレイパークの設計をした。地域全体でこどもを守り、高齢者の積極的な市民参加を誘発する空間でありながら、災害に備えて広域避難場所として充分な機能を果たすことができる。景観や四季との融合を考えたことから、青森市では特に雪害が顕著であるため、それに適した設備や仕組みを考え取り入れた。

【補注】

(1) 自然の中で、おとなの指導なしにこどもの自由な発想から生まれた遊びを通してこどもの成長を促す遊び場。

秋田県立大学システム科学技術学部
建築環境システム学科　建築・都市アメニティグループ
Urban and Architectural Planning Lab. Dept. of Architecture and Environment Systems
Faculty of Systems Science and Technology, Akita Pref. Univ.